

【主題】協働の喜びを実感し、学級への所属感を高める学級活動

【副題】話し合い活動と業前活動の工夫を通して学級目標の実現を図る一試み

【学校・団体名】山元町立坂元小学校

【役職名・氏名】教諭 橋本 奎

1 主題設定の理由

本研究は、令和6年度に第4学年で行った実践研究である。本学級では、「よく考える子供・友達のことを考える子供・最後まで頑張る子供」の3つを学級目標として掲げた。児童、保護者、教師の願いから導いた「助け合い」「みんななかよし」「やるときはやる」というキーワードをもとにして児童と話し合い「がんばりばち」「おたすけばち」「なかよしばち」からなる「みつばち(3つばち)」という学級の合言葉(図1)を設定し、児童と学級経営に対する共通認識を持ちながら日々の生活に励んでいる。

穏やかで温かな関係性が築けている一方、感染症対策のためにこれまで実践が難しかった小集団学習や、集会活動などの集団実践の経験不足からくる協働的な活動に対する苦手意識や、それに伴う協調的な関係性の希薄さが日々の生活態度の中で垣間見られる。

そこで、本研究では集会活動を目的とした話し合い活動や業前の時間を活用した協働的な活動を数多く経験させることで協働する喜びを感じさせると共に、学級への所属感を持たせ、その上で仲間との望ましい人間関係の構築を図ることを目的とし、本主題を設定した。



図1 教室後方壁面に位置付けた合言葉「みつばち」

2 研究の目標

学級の日常的な活動において、学級目標の実現を目指しながら、互いのよさを認め合う学級集団として望ましい人間関係づくりに有効な手立てを探る。

3 研究の方法

以下に示す視点で手立てを講じ、児童と学級の変容を図る。

【視点1 協働する楽しさを実感する話し合い活動の工夫】

- (1) 見通しを持って学級活動に取り組もうとする意欲を高める「学級会年間活動計画」の立案
- (2) 話し合い活動に主体的に取り組もうとする態度を育てる「学級会マニュアル」の活用
- (3) 主体的に集会活動の計画・運営ができるよう目的や協議事項をまとめた「集会をしようカード」の活用

【視点2 学級への所属感を高める業前活動の工夫】

- (1) 学級への所属感と自己肯定感を高める「一日の振り返り」の工夫
- (2) 児童の自治的能力を育む「みつばちタイム」の設定
- (3) 他者理解を促す「探究の対話(p4c)」

なお、ここでは10分間の朝の活動、朝の会、帰りの会をまとめて「業前活動」と表現した。

4 研究内容

【視点1 協働する楽しさを実感する話し合い活動の工夫】

- (1) 見通しを持って学級活動に取り組もうとする意欲を高める「学級会年間活動計画」の立案

児童の実態として、これまでの学校生活において、話し合い活動を実施した経験が多くないことが分かった。入学時が感染症対策のために様々な活動が制限されていた時節だったために、取組を重ねることが難しかったことが原因と推測する。そこで、経験不足を解消するために、4月に学級活動のオリエンテーションを行うことから指導を始めた。

話し合い活動の方法を学んでいく中で、見通しを持って活動に取り組めるよう工夫したのが「学級会の年間計画」である。本来であれば、必要感を持った話し合い活動を実現するため、集団生活の中で児童が抱える困り感や生活上の課題をその都度採り上げて議題として設定するのが一般的である。しかし、本実践においては「協働のよさを味わうこと」を第一に考え、集会活動や事後の活動に協働する場面を伴う議題を中心にし

て計画を立案した。児童から集めた「提案カード」をもとに、全員で内容を確認しながら集会活動を中心に据えた学級会年間計画を策定した(図2、図3)。

夏休み後に計画した「夏祭り(おもちゃ祭り)」、国語科の学習と連動した「読書の秋を楽しもう」、今年一年を振り返り来年も頑張ろうという意欲を高める「来年もがんばろうぜパーティー」など、提案カードを元に、児童の発想を生かした集会活動を実施した。

活動計画を作成し、教室に掲示したことで、児童は見通しを持って学級活動の準備ができただけでなく、集会活動を実施する時期が明確になるため、各集会間の連続性を意識した取組が可能になった。



図2 提案カードを使って年間計画を立案する様子

| 学級活動年間計画 | | | | | | | | | | | |
|------------|---------------------------|-----------------|-------------|-----------|---------------|---------------------------------------|-------------|----|----|--|------------|
| 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 | | |
| みんなの歌をつくらう | ミニオリンピックをしよう (けん玉種目追加) | 夏祭り(おもちゃ祭り)をしよう | クラスのマークを作らう | 読書の秋を楽しもう | クラスのゆるキャラを作らう | 来年もがんばろうぜパーティーをしよう (一人一人のいいところを追加) | みつばちカルタを作らう | | | | 教室お別れ会をしよう |

図3 教室に掲示した学級活動年間計画

(2) 話し合い活動に主体的に取り組もうとする態度を育てる「学級会マニュアル」の活用

学級会の指導にあたり、「司会マニュアル」「発言マニュアル」を作成した。計画委員が活用するための司会マニュアルには、学級会の進行に関わる話し方や発言を促す言い方を示し、円滑な話し合いを実現すると共に、合意形成に至るまでの方法を身に付けることをねらいとして作成した。計画委員以外の児童には、話し合いの中で、適宜その場で必要となる話し方を提示した「話し方マニュアル」を参考に発言をさせるよう指導した。

この2種のマニュアルの活用により、混乱しがちな話し合いの3つの段階「出し合う・比べ合う・まと

める」が明確に分かれ、円滑な話し合いへと作用している様子が見られた。中には、司会が場面に沿った発言を促す姿も見られるなど、児童が話し合いの方法を身に付けつつある様子を見取ることができた。

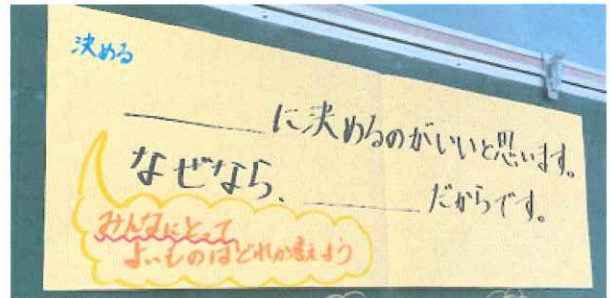


図4 「話し方マニュアル 決める」

(3) 主体的に集会活動の計画・運営ができるよう目的や協議事項をまとめた「集会所しようカード」の活用

話し合い活動における「決まっていること(場所や時間などの条件)」は合意形成を図る上で、欠かすことのできないものである。この「決まっていること」を意識しながら話し合いができるようになってほしいと考案したのが「集会所しようカード」(図5)である。

これは、集会活動の実施理由、目的、日時や場所、プログラムを示したものであり、提案者と担当の計画委員が作成する。このカードを活用したことで、集会の目的を明確にして話し合いに臨むことができた。また、話し合いの中で、電子黒板に拡大して提示することで、話し合いにおける「決まっていること」として活用することができるなど、よりよい合意形成を図ることができた。

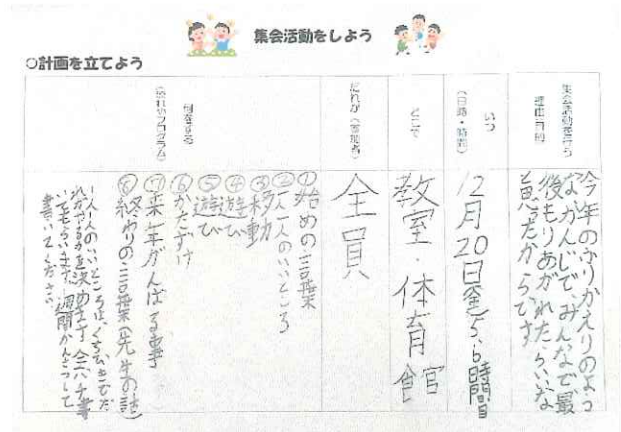


図5 作成した「集会所しようカード」

【視点2 学級への所属感を高める業前活動の工夫】

(1) 学級への所属感と自己肯定感を高める「一日の振り返り」の工夫

所属感と自己肯定感を高めるための手立てとして講じたのが、帰りの会で行う「みつばちさがし」である。4月に学級の合言葉として「がんばりばち」「なかよしばち」「おたすけばち」を設定した。日直が一日の生活の中で見つけた「みつばち」に関わる友達の行動を紹介する時間である。

「みつばちさがし」カードを3種類準備し、司会は、自分が発見した友達の行動を、該当するカードに書いて紹介する。「〇〇君がバケツの水をこぼした時に一緒に拭いてくれた。」「〇〇君と〇〇君が学級会の司会を頑張っていた。」のように記述するなど、「みつばち」の観点に沿って一日の振り返りをさせた。児童にとっても、自分の行動を友達に認めてもらい、更に教室に掲示されることによる居場所作りとしての機能を果たすことが居心地のよさにつながることを期待した。

しかし、名前が掲載される回数に偏りが出るという課題が見受けられた。そこで、12月に予定していた「来年もがんばろうぜパーティー」の中に位置付けていた「一人一人のいいところ探し」をみつばちさがし形式で行うことにした。一人一人に担当を決め、一週間の行動を継続して観察させることにより、全員が3つのみつばちを紹介してもらうことができるようにした。



図6 「みつばちさがしカード」

(2) 児童の自治的能力を育む「みつばちタイム」の設定

高学年になるとクラブ活動や委員会活動、縦割り活動などでリーダーとして集団を動かす機会が多く生まれる。そこで、4年生の段階から集団を動かす機会を全員に設定することで、経験を持って学ぶことができるよう、10月から朝の会の中に「みつばちタイム」を設定した。

「みつばちタイム」は3人1組の生活班単位で、学級のみみんなで遊ぶミニゲームを運営する取組である。しかし、ミニゲームの運営といえども、いきなりできるものではない。そこで、児童によるみつばちタイム

の運営は1月からとし、そのための準備期間として、10月から12月の期間は見本として教師が進める様子を示すことにした。行ったミニゲームは教室のみつばちタイムの掲示物に蓄積した(図7)。

毎週月曜日のみつばちタイムは生活班での打合せの時間とし、掲示物を見ながらどのミニゲームを行うか、誰が主担当として進めるかを確認し、火曜日から金曜日の4日間で運営が一回りするシステムを構築した。回数を重ねる度に進行も上達し、指示の出し方やゲームの進め方など、教師が助言をしなくとも自分たちで運営することができるようになった。



図7 教室に掲示した「みつばちタイム」の掲示



図8 ミニゲームを運営する児童の様子

(3) 他者理解を促す「探究の対話(p4c)」

本校では、毎週月曜日の朝の時間をp4cの時間と位置付けており、全学級において対話する活動を行っている。本学級では、対話の話題選定のために問いを収集する箱「ワンダーボックス」を設置した(図9)。p4cにおいては、児童自らが「問い」を考え、設定することが肝要である。そこで、学級にワンダーボックスを設置し、いつでも用紙に記入して投函できるよう環境

を構成した。「みんなにとっての幸せって何。」「友達ってどんな人。」という問いが投函され、そのワンダーカードをもとに毎週対話を行った。

当初は自分の思いのみを話している様子だったが、回を重ねるに連れて、友達の話聞いて考えたことや「それも分かるけれど・・・」と考えを受け入れながら自分の思いを話す児童の姿が見られるなど、他者の考えを尊重しながら対話する姿が見られるようになった。p4c のルールの下で行うという安心感が児童の受容的な姿を生み出したと考えられる。



図9 p4cの様子とワンダーボックス

5 結果と考察

(1) 研究の成果

学級の合言葉について、みつばちの3つの観点に沿って、学級の達成度を100点を上限とした数値で定期的に自己評価させた(表1)。

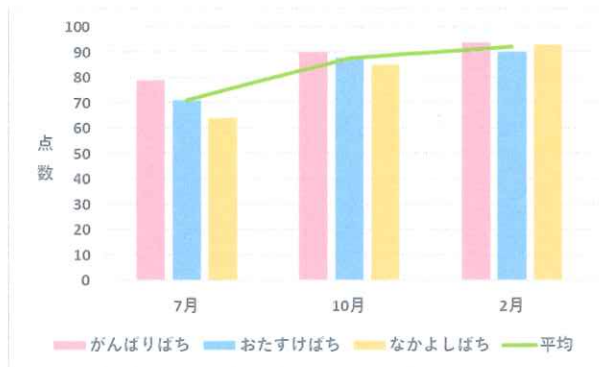
7月の達成度評価では、3観点において学級平均71.3点となり、相対的には「なかよしばち」項目が64.7点と低かった。10月の達成度評価では、学級平均87.7点であり、7月に低い数値だった「なかよしばち」項目が85点と大幅に向上した。2月に行った達成度評価では、3観点において学級平均92.7点となり、中でも7月に最も低かった「なかよしばち」が90.5点を記録した。

達成度評価の理由の中に「イベント」「みつばちタイム」という記述が見られたことから、話し合い活動を経た集会活動や業前の取組が児童の相互理解を促し、助け合いの心や自治的活動への意識を高め、学級目標に対する求心力を高めたものと考えられる。

話し合い活動を踏まえた集会活動や業前の時間の充実を通して、児童は協働する喜びを感じ始めている様子が見られるとともに、他者意識が芽生え始め、学級集団のために行動しようとする様子が発言や行動の節々に感じられるようになるなど、学級の合言葉「みつばち」を目指してよい学級集団になろうという思いが見

られるようになった。

表1 学級の合言葉の振り返りの学級平均の推移



(2) 今後の課題

年間を通じて、10回の話し合い活動と集会活動を実施した。協働的な活動の経験不足が見られたため、活動の楽しさを味わわせることを目的として回数を重ねた。学級目標の合言葉の振り返りの数値の向上から、児童に集団意識が芽生えてきた様子を見取ることができる。

一方で、協働的な活動の楽しさを味わうことができたものの、振り返りには「楽しかった。」という感想に終始している記述が見られ、個人としての感想の範囲を超えることができなかったことは大きな課題である。

集会活動の目的の意識付けを話し合い活動、準備期間、集会と一貫して行うことで、よりねらいに迫った話し合い活動並びに集会活動を実現することができる。また、学級集団の成長という視点を持たせて集会活動を振り返り、更にその振り返りを児童間で共有させることで、より集団意識を持つ学級を育てることができるのではないかと考える。

6 結びに

話し合い活動では、集会活動の遊びを決める話し合いや工夫を考える合意形成について経験を重ねてきた。一方、集団の課題について考える議題についての話し合いは実践できていない。今後は、身に付けた合意形成の方法を生かして課題解決の方法を考える議題についての話し合いにも挑戦することで、自己指導力も高めていけるような学級集団の育成を図りたい。

7 参考文献

- ・「みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる特別活動(小学校編)」2019年1月 文部科学省
- ・「子どもたちの未来を拓く『探究の対話(p4c)』」2017年12月 p4c みやぎ・出版企画委員会